現代中国経済用語の一考察

折敷瀬興

(一) 経済用語の大量出現

一九七九年、中国が開放政策に踏み切って以来、中国大陸の経済生活は天地もくつがえるばかりの大変化を遂げた。この変化にともなって大量の経済関係の用語が出現した。《現代漢語詞典》は中国社会科学院語言研究所が国の委託を受けて編纂し、二〇年の歳月をへて一九七九年に出版された、中国でもっとも権威のある辞典であるが、われわれがここでいう新用語とは、主として、この辞典が収録しておらず、且つこの一〇数年に現れた用語を指している。

試みに一九八九年四月二九日の《北京晩報》の紙面を例にとって見ても、新用語の数は実におびただしい。板工、并处、裁工、查实、拆迁、成交价、打印纸、待业、单放机、地陪、多士炉、福利企业、个体户、关系户、后期制作、激光打印机、结构先入法、经济效益、老年职业介绍所、冷餐、农贸市场、票幅、求职、全陪、肉联厂、社会效益、审计、售后服务、书市、索贿、套床、五笔字型、小区、新潮、协办、验车、原装、增速、展卖などがそれである。その内の大部分は広い意味での経済用語とみなすことができる。

われわれがここで論ずる経済用語とは、社会で一般の人々に用いられるものを対象とする。用語のあるものは経済術語に由来する。例えば、股票、股市、汇率などがそれである。しかし、まだ一般的に用いられていない経済学術用語はわれわれの討論の範囲に含まれていない。

何故ならそれは経済学の学術上の問題に属するものだからである。

また、われわれのいう新用語とは、旧用語に属しながら新しい意義、新しい用法を生み出したものをも含むものとする。

（二）言語研究の観点から見た経済用語大量出現の特徴

(1) 言語と社会の関係から見れば、経済用語の発生と発展は、言語と社会の間の矛盾の発展作用の結果である。いわゆる言語と社会の矛盾の主要な表現の形態は「名」と「実」の間の矛盾である。「名」と「実」の間の矛盾にはまた主として四つの情況がある。

「有实无名」、「有名无实」、「名实不符」、「名实不和」である。

先ず「有实无名（有実無名）」であるが、これは、経済生活に新しい事物が出現したが、まだそれを表現する言語符号がないことである。そこで、この種の経済事物を反映した新用語あるいは新しい語義が出現する。たとえば社会的に不公平な分配の現象が生ずれば、「脳体倒挂」という言葉が生まれる。これは、肉体労働の収入が頭脳労働のそれを上回り、単純労働の収入がより高度な労働のそれを上回ることを指している。これに付随して「順口溜（はやりことば）」が流行する。例えば「手术刀（メス）をふるっても剃头刀（かみそり）に及ばず、导弹（ミサイル）を作っても茶叶蛋（味付け玉子）を売るのに及ばない」（刀と刀、弾と蛋は同音のかけことば。意味は医者が床屋に及ばず、ハイテク技術者が卵売りに及ばない）は、この種の「脳体倒挂」の不合理を茶化している。また、大都市では地価が高騰している。新しい建物を建築するため、古い家を取り壊さなければならない。そこで、一連の新しい言葉が生まれてくる。古い建物を取り除き高層ビルを建てることを「拆建」という。元の住民を転居させることを「拆迁」といい、この「拆迁」した住民を「拆迁户」という。「拆迁户」を動員して期限をきって引っ越すことを「动迁」という。引っ越しをさせられた「拆迁户」をまた「动迁户」とも呼ぶ。ある「动迁户」は「动迁」を受け入れず、引っ越しに応じない。これをまた「钉子户」と称するのである。もし

「钉子户」を強制的に引っ越しさせれば、これを「拔除钉子户」と表現するのである。

次は「有名无实」である。これは経済生活に変化が生じ、ある種の経済事物が消失したが、それらを指す用語は依然として存在し、「有名无实」の言語符号になっていることを指している。これらの「有名无实」な言葉のあるものは、次第に言語の中から消失する。しかし、他のあるものは長期にわたって言語体系の中に保存され、特定の歴史事物の言語符号となり、元の意味を保持してゆく。たとえば、文化大革命前は商品が欠乏し、物を買うには往々にして「券」が必要で、これを「工业券」と呼んだ。一人毎月一枚で、腕時計を買うには十二枚の工業券が必要であり、「二两」（五〇g）」のお茶を買うには、〇・五枚が必要だった。八十年代に入ると、これらの物資購入証は使わなくなった。食糧、油、肉を買う「粮票」、「油票」、「肉票」などに至っては四十数年にわたって実行されたのである。中国人は食事をするのに何「两」食べると言い習わしているが、それは食糧が一定量の配給があり、計画的にそれを使わねばならぬからであった。現在、食糧は自由売買ができ、「粮票」は取り消された。「粮票」、「油票」、肉票」はすでに過去のものとなった。だが、目下ガソリンを買うにはまだ「油票」が必要で、車を運転するものには必需品である。他の例では、今年中国の為替レートが「并轨」となり、統一の為替レートを実行して、外貨券は発行されなくなった。「外汇券」――この言葉もこれからは歴史的な名詞となるであろう。

第三は「名实不符」である。これは社会経済生活が発展して変化したが、古くからある言語符号がそれに対して的確な概括を加えられないことをいう。そこで、不断に用語が革新されてゆく。たとえばこの十年来、「二道販子（ブローカー）」に相対して「倒爷（ブローカー）」という言葉が現れた。確かに、最初この商売を始めたのはほとんどが成年男子であったろうが、「倒风」がますます激しくなるにつれて、婦女もこの業界に加わり、これは「女倒爷」と呼ぶよりなかった。事実は、「倒」業は成年男子に限らず、老若男女等しく行えるのであって、「爷」がただ成年男子を指していることは、「名实不符」であり、「名实矛盾」であっ

た。そこで「倒姐」、「倒奶奶」等の新語が出現した。

第四は「名实不和」であり、これは「名」と「实」が一致はするが、人々はそれになじむことができず、受け付けない。そこでやはり言語の創造がなされるのである。たとえば「电饭煲（広州では電気釜の意）」は、北方人は口になじまないため「电饭锅」と呼びかえ、「电热褥（電気マット）」は、ある地方では「电热毯」と呼び、「液化石油气罐」とは言いにくいので、多くは「煤气罐」と称される等々である。

(2)　言語構造そのものから見れば、経済用語の絶対的多数は名詞、動詞の二種類に属する。前者は事物を指し示し、後者は行為を指し示す。新しい事物にともなって生れた名詞はそれこそさまざまだが、大は政策方針から来る用語を含む。例えば、「计划经济」、「商品经济」、「市场经济」、「家庭联产承包责任制」、「社队企业」、「乡镇企业（社隊企業は人民公社と生産隊の企業を指し、人民公社が取り消されて後、社隊企業はなお存続して、一九八四年三月、国務院は社隊企業を郷鎮企業と改称することに同意した）」、また例えば、「特区」、「开发区」、「开放城市」、「沿海十四个开放城市」、「保税区」等である。これらの名詞は急に現われてきたため、当初用語が定着していなかったものも多い。「开发区」の如きは、又「科技特区」とも呼ばれた。《光明日報》一九九一年三月「科技特区とは、高級新技術開発区を指し、その優待政策は経済特区、経済技術開発区に近い」。《中国青年報》一九九一年四月「一つの新名詞『科技特区』。この新名詞の別の表現は『中国の高級技術産業開発区』である」。

経済領域において各種事物は次々と尽きることなく現れ、各種の経済新用語はそれに応じて生まれている。たとえば、仕事を紹介するところを「劳働市場」と呼び、「人市」とも呼んでいる。王梓夫《異母兄弟》「運転手は車を建国門付近の小さな林に乗り入れた。林には人が一杯だった。大部分は女で、田舎から出てきたのだ。彼は、わたしにこれが『人市』だと教えた」。《北京青年報》一九八九年三月「他の『市』とは違って、「人市」にはいかなる役所の承認もなかったし保護もされず、しばしば取締りを受けた」。また「鬼市」は闇に乗じて取引をおこなう非合法の自由市場を指す。「科学技术市场」があり、科学技術を譲渡する。農村

には「科技早市」がある。《市場報》一九九一年七月「河北保安市満城県の統計によれば、全県ですでに比較的大規模な「科技早市」が二〇数個あり、一般的な規模のものは一〇〇個以上ある」。

時には、一種類の商品に三つの価格がある。国営商店が「油票」によって売り出した食用油（量に限りあり）は公定価格で、「油票」によらず売り出したものは公定価格より少し高く、「议价」と呼ばれる。自由市場が売り出したものは市場価格である。工業製品には「长线产品」があり、ストックが充足しており、需要を満足させ、供給過剰にさえなる産品を指す。これと反対なのが「短线产品」で、ストックが不足し、需要を満足させるだけの量はなく、供給不足にさえなる産品を指している。許滌新《中国社会主義経済発展の中の問題》「ある種の工場の生産は、社会の需要と食い違いを生じ、利潤が少ないが、それでも社会的に需要の多い製品は生産せず、そこで「短線産品」は、ますますに品不足となる」

動詞におけるの新用語が反映しているのは、各種各様の経済行為である。「切汇」は、路傍のマネーチェンジで、交換の一方が得るべき金額の一部をだましとることを指す。「搭卖」は、抱き合わせ販売、売れ行きのよい商品を売り出すにあたって、デッドストック（不良在庫）を付け加えることを指す。《文匯報》一九八七年六月二五日「タバコと飴、春雨と茶請けと全然関係のない物が、無理に組み合わせて売られている。『搭卖』の風はしばしば禁じられながらどうして止まないのか？」。農産物の買い付けの中で、農民にもっとも不満を抱かせる行為に『打白条』がある。すなわち、その時に荷主に現金を支払わず、一種の空手形（手書きの仮支払い証明書）を発行することである。計画経済の条件下では、一般に良い品物を輸出に用いる。これらの商品が何らかの原因で、再び国内販売に投入される時、「出口转内销」と呼ぶ。人々は「出口转内销」の産品が入手しがたい良品であることを知っている。この言葉は相当広く使われている。例えば、《新聞戦線》一九八八年第一期「ニュースの『出口转内销』現象は非常に突出しており、ある重要ニュースを、まず外国人に伝え、その後国内に流す、あるいはそれが外国から逆輸入されて入ってくる、この様な現

象は改めるべきである」。

（三）現在の中国経済用語の特徴

(1) 大量の経済改革、経済建設、経済現代化関係の用語が出現した。

経済改革関係では、深圳特区が開かれて、「深圳速度」という用語が生み出された。元は深圳が十年たらずの時間で一つの現代化された都市を建設した成績を概括した専有用語であったが、現在は広く使用されており、人を驚嘆させるようなものを「深圳速度」という。

「包干」元々は中国が戦争時期と解放初期に幹部に対して実行した待遇の方式で、食糧を供給し、且つ賃金を支払う半供給、半賃金制度である。現在の意味は完全に変化して、ある種の管理制度を表現するのに用いられる。すなわち、ある任務の遂行にあたって一定の権力が与えられ、任務を完成することによって、一定の利益を享受するが、もし完成しないときは規定により処罰を受けるものである。「包干」の用語は比較的ひろく使われ、業務が異なれば区別が生ずる。たとえば、「农村包干」、「企业包干」、「财政包干」等である。

「风险基金制」企業が実行する一種の互助制度で、労働者がその収入の一部分を危険基金として企業に供出する。労働者と企業が同じ立場で共に助け合い、同時に企業の資金不足を解決することができる制度とされる。

「转轨变型」元来生産あるいは管理方式を改変すること。「转轨」とは企業が単純生産から経済効益の上昇を中心とした軌道に変わることで、「变型」とは主として企業管理が生産型から生産経営型管理あるいは経営型管理に変わることを指す。

「法人承包」経済効益の比較的よい企業が法人の名義で、赤字企業あるいは薄利企業を引き受けることを指す。

「关停并转」企業整理を行う上での四つの措置方法。産品の品質、生産高が劣り、エネルギーと原材料の消耗が高く、長期の赤字、環境汚染が深刻な企業はその程度によって閉鎖、生産停止と整理、合併あるいは生産転換を行う。

「承包制」請負制。仕事を請け負い、これに相応する責任を引き受けること。請負の範囲は非常に広範で、「农田承包」、「水面承包」、「荒山造林承包」、「商店承包」、「企業承包」等がある。

「产权转让」企業の財産所有権を商品として有償譲渡すること。一九八六年、八七年の二年間に少なからぬ省市に有償譲渡の改革実験が行われた。《文匯報》一九八八年四月一四日「企業改革の二度の波――拡権と承包の後に、第三の波――産権転譲はいままさに形成されつつある」。

「宏观调控」国家が経済的手段を用いて経済の発展を調節、規制すること。一九九三年初冬、中国各地の穀物、食用油の価格が上昇したために、国営食糧販売店が大量に穀物、食用油を放出して、穀物、食用油の値上がりを抑制し、このために生ずる諸物価の値上がりを避けた。

「信贷改革」改革前の銀行の貸付は、政治面の顧慮が優先し、経済面はあまり考慮されず、貸し出すだけで回収を考えなかった。結果として不良企業を保護し、親方五星紅旗を助長することになった。信貸改革とは貸付に企業の経営状態と支払能力を考慮し、企業の発展を促すようにすることを指す。

「三资企业」外国独資企業、中外合資企業と中外合作企業を指す。

経済建設関係で見逃せない用語としては「南水北调」があり、長江水系を河北、西北に引き入れ、河北の水不足の問題を解決しようとしたことを指す。

「长江三峡工程」これは水運、航運、灌漑を兼ねた画期的な工事で、すでに建設が始まっている。

「三北防护林体系」中国の東北、河北、西北と連なる地帯に大型の防護林の体系を計画造林することを指し、一九七九年に始まった。

経済現代化の用語は相当に多い。新しく現われたものとしては、この一〇年間に建設された「京津塘高速公路」、「沪宁高速公路」、「沈大高速公路」等（これ以前は中国には高速道路はなかった）、高速鉄道の試験建設の開始、エネルギーの現代化の解決のための「泰山核（原子力）发电厂（所）」、「大亚湾发电厂（所）」等の建設等。「电子一条街」は一九八六年末、北京海淀区に建設された新型の科学技術産業区を指し、ハイ

テク産品を開発し、経済構造からくる変化の必要性に対応する。また「科研生産联合体」が出現したが、それは科学研究機関、大学と専門学校等の科学技術力の密集した部門と生産部門により成り立っており、新しい分野を開発し、科学研究の新成果と技術指導監督能力を押し進めるようとするものである。

経済の現代化は各方面に現れている。たとえば「信息经济」がある。劉鉄民《ハイテク・世界と中国》「信息経済とは産品および労務の中の物質的消耗が減少し、その情報および情報機能の比重を高めた経済である」。「信息交易所」が出現し、「信息集市」とも称せられる。これは情報を集め、発信し、交流する場所である。通常は有償交易方式を採用する。《半月談》一九八六年一七期「信息交易所は取引先に短時間に数多くの情報を与え、ある種の情報はその応用により速やかな経済効益が得られる」。「信用卡」はクレジットカード。《深圳特区報》一九八八年一〇月八日『信用卡』は携帯に便利で、安全で信頼性があり、現金流通を減少させ、資金の運転を加速し、決算の効率を高め、総合的な利用、紙幣貨幣の管理等の優れた点がある」。

(2) 経済生活の中に、正常ならざる、あるいは、甚だしくは違法な活動が大量に現れたが、これと相関連して各種の用語が出現したこと。たとえば、

「诸侯经济」経済建設の中で、全体の利益を考えず、その土地の利益のみを考える自己本位主義の現象を指す。

「回扣」ある種の部門あるいは個人が商品物資の経営権、調達権、建築据付け工事の施工請負権など種々の経済実利に関係ある実際の権力を利用して、市場需給関係の変化に乗じて、あるいは買い手から一定比率のマージンを取り立て、あるいは故意に買い手と一緒に証票収支金額を上乗せし、共同して記帳した支払いと実際の支払いの差額を山分けすることを指す。

「首长项目」機関による調査研究を経ずに、関係部門の個別の首長の決定により建設された工事計画。

「条子工程」機関による調査研究を経ずに、指導幹部個人の命令書の決定により建設された工事。

「胡子工程」長年にわたり延期されている古い工事。

「摊派」上級部門が政策の規定に違反して、割り振

りあるいは指名の形式で企業資金、物品あるいは人力を調達する行為を指す。

「貿易大战」マクロ的調整と市場管理等の不備により、八〇年代後期に幾つかの地区で連続して農業、酪農、漁業産品と原料の値上がり、奪い合いの紛争が発生したことを指す。たとえば、「羊毛大战」、「对虾（エビ）大战」、「苹果（リンゴ）大战」、「蚕茧（カイコ）大战」、「板栗大战」等がある。

「切汇」為替ブローカーが外貨ブラックマーケットでの交易の中で、顧客が得るべき額の中から一部分の金を騙し取るやり方を指す。

「炒金热」機関あるいは個人が争って金の買売買の活動に加わる現象を指す。

「炒卖批文」関係部門が販売購入を許可したある種の商品ライセンスを商品として、投機転売を行う行為を指す。

「挨宰」本来の意味は、家畜が屠殺されることを指す。現在は普通、物を購入する際、騙されて比較的高い価格を支払うことを形容し、あるいは支払った代価に相応しくない商品を指す。「被人宰了一刀（人に切りつけられる）」等の言い方も同じ意味である。たとえば「昨日わたしは担ぎ屋に「宰」了一刀、给人家卸了半扇儿」などと言う。その意味は、担ぎ屋からその価格に全然合わない商品を買って、大損をしたことである。

「盖章专业户」もっぱら人の印を押すための事務に専門的に従事する人員を指す。「盖章专业户」は人のために奔走し、至る所で印を押す。その費用の高低は、捺印の数と捺印の難度によって決められる。

「倒汇」中国人が人民元を用いて、外国人と外貨券、外国貨幣を兌換することを指す。外国人が外貨券を使って日用品を買うのは非常に高くつき、人民元を用いて普通商店で買えば非常に安くあがる。中国人は人民元では価格の高い高級商品を買うのは難しく、外貨券、外国貨幣を用いて買うことができ、且つ直接に人民元を用いるよりも安い。そこで社会的に「倒汇」をやる投機市場が出現した。ただし今では外貨卷は廃止された。

「变相涨价」量を減少させ、質を低下させる等の方法で、価格は一見したところ変化はないが、実際上は

値上げとなるようなやり方、あるいはただ商品の包装、ブランド、名称を変えて、高品質の新製品と錯覚させ、高価で売るようなやり方。

「稔性亏損」企業の原価計算が実際と合わずに損をすること。たとえば「ある地区の三八戸の工業企業は帳簿上では一七一五万元の欠損になっているが、実際の欠損額は三八二七万元であり、その原因は企業原価が真実を失していたためである」一九九一年七月五日《四川日報》

「偽冒商品」「バラ積みになっている『活力28』超濃縮洗剤は、きっと「偽冒商品」（偽造商品）に違いない」一九九一、一、六《消費時報》

「假出口」対外貿易部門が輸出の名のもとに、比較的安い国際市場価格で輸出用品を買い付け、高価格で国内に販売してもうけること言う。「假出口のやり方は、生産企業がおとなしく任務を全うすることで、対外貿易公司が金を稼ぎ、馬鹿を見るのは国家である」《文匯報》一九八九年五月二八日

「揽爷」旅客を集めて旅館に泊まらせ、そこから利益を得る人。「揽爷たちはゲリラ部隊のように神出鬼没だ。彼らは旅客の群の中にあって、黙っておればただの客、口を開けば看板である。《北京青年報》一九九〇年一二月二五日

「吃床板」「吃床腿」とも言う。旅館が客寄せのために、公用で出張した人員の飲食費等の自弁費用も宿泊費の中に含めて、客の勤務先に収支報告をさせること。「彭水第二招待所は旅客に『吃床腿』させた」（《人民日報》一九八五年六月一日）「不完全な統計によれば、この三軒の旅館は、一年以上の間に偽伝票一三・五万元を発行した。国家の物価規律および財政と経済の規律に違反したこの『吃床板』は、国家を害する不法行為で、必ず制止されねばならない」（『経済日報》一九八六年八月一三日）

(3) 用語の由来から見ると、大部分は新しく創造されたものであるが、旧中国時代の言葉の復活もかなり見られる。

新用語を創造するのは、多くが漢字の固有の語素（形態素）を利用するものに属する。そして新用語を造りだし、あるいは固有の言葉を用いて新概念を表示

する連語（フレーズ）を生み出す。たとえば、「暗补」。《現代漢語詞典》乃至は《漢語大詞典》にはこの言葉はなく、新用語であって、国家が「相当量の供給品、たとえば豚肉、食料、布、砂糖、食用油等で、消費者におおやけにしていない購入販売差額の補助を行う」ことを指す。以前には「暗貼」という語があり、資本家が労働者の支持を得るために、暗に賃金の補填を行うことを指していた。現在、各種商品の価格が陸続として自由化された後、自然に「暗补」は取り消され、「明补」に改められた。《人民日報》一九八八年四月一日「わたしは『明补』は『暗补』より良いと思う。『明补』が理想ではないけれど、少なくとも現在はやはり行うべき措置である」。

また、「独資」という言葉は《漢語大詞典》にはなく、《現代漢語詞典》には「独占資本」があって、「垄断資本」（中国では一般に独占資本を「垄断資本」という）を指し、経済学術用語である。だが「独占資本」は「独資」と略称することはできない。今日いう「独資」は、一人の投資者が単独で投資して創立、経営する企業あるいは商店を指している。《文匯報》一九八八年二月一一日「投資環境を改善し、外国商人を力づけ、『独資』企業を創立、経営する」。

また「创收」という語は以前には使われなかったが、現在は非経済単位が財源を開発し、収入を増加させるための各種の有償サービス活動を指している。「创」はかつてやったことのない事を開始することを指す。この語の創造は、中国語が非常に強い造語力を有することの好例といえよう。公園、博物館、図書館のような公共機関も「创收」に乗り出し、いろいろな名目を立てて費用を取立てる。それが多くの機関に蔓延し、費用を乱徴収する現象が多発した。

これらは二つの語素を合成して作られた新用語である。その他に派生の方法がある。すなわち、一つの語根と一つの接尾語を結合し、新用語を生み出すのである。たとえば、経済活動と文化活動を一体化し、いわゆる「文化搭台经济唱戏（文化が橋渡し、経済が劇を演じて）」多くの「节（祭り）」が出現する。例えば北京大興県は西瓜を産する。そこで暑い日には「西瓜节」を行い、西瓜を賞味し、文芸演出を見物し、商談を行う。吉林省の吉林市には樹氷があるので、「雾凇

冰雪节」を催す。《人民日報》一九九一年一二月の報道「北国吉林市は来年一月一日から三一日まで一九九二年中国吉林省樹氷氷雪節を行う」。山東灘坊では毎年春節（旧正月）に「国际郑州风筝节（国際鄭州凧上げまつり）」を挙行する。河南省境内には少林寺があり、著名な少林拳はここで生じた。そこで一九九一年秋に「武術节」を催し、これを機にバイヤーを集め、外国の投資を引きつけようとした。屈原は汨羅江に投身して死んだ。毎年五月五日の「端午节」には龍舟が競って渡り、屈原を記念する。汨羅江は湖南にあり、湖南では「競渡节」を行う。また江西景徳鎮では「瓷器节」を催し、洛陽では「牡丹节」を行う等々。《人民日報》所載の楊漾の文章《节不宜滥》に言う「祭りが多すぎて、一年三六五日を埋め尽くしてしまい、どうして仕事ができようか」。実際は彼の心配は余計なことで、ここでの「节」と「中秋节」、「元宵节」等の「节」とは意味が違うのである。「节」はもはや意味がなくなった一種の接尾語にすぎない。われわれは「あなたはどこで中秋節を過ごしましたか」、「中秋節の日わたしは汽車に乗っていました」と言うことができるが、「西瓜节」、「瓷器节」、「牡丹节」はこのように用いることはできない。経済文化の発展は字義に変化を生じさせる、これは面白い一例である。

経済用語の大量の創出は多くの派出語を生み出している。たとえば、

「热」原意はただ温度の高さであるが、現在は人の関心を引きつけ、人の歓迎を受け、競い合って参加する、あるいは切実に手に入れたいというニュアンスの接尾語である。強い造語能力を有し、名詞、動詞、連語（フレーズ）等と合成して多くの経済用語を形成する。「公司热」、「经商热」、「建房热」、「装潢热」、「引進热」、「股票热」、「开发区热」等がそれである。

「户」それ自体の意味はもはや大分うすれてしまい、非常に強い構成能力を持つ接尾語になっている。名詞、動詞、形容詞、連語（フレーズ）等と合成して、変則的な経済用語をつくりだす。たとえば「专业户」、「钉子户」、「关系户」、「贫困户」、「万元户」、「十万户」、「百万户」、「冒尖户」等である。

「族」原意は民族あるいは家族等であるが、現在で

は同じ特長を有し、好みを同じくする人々を形容する語尾となっている。連語（フーレズ）と一緒になって変則的な経済用語を構成する。たとえば、「上班族」、「吸烟族」、「追星族」等である。

「化」一種の趨勢を表す語尾で、その構成する変則的な経済用語には「批量化」、「低齢化」、「成人化」等がある。

「型」言葉の意味には二種類あるが、いずれも強い構成能力を備えた語尾で、それから構成された用語には「开放型」、「开拓型」、「封闭型」、「生产型」、「外向型」等がある。

以上の「节」、「热」等は接尾語に属するが、また語根の前に置かれる接頭語もある。たとえば、

「炒」元の意味はものを火の上にかざし、絶え間なく揺り動かして、熱を加えることであるが、現在は重要な接辞になり、名詞とあい連なって売買や転売の投機的取引で利益を図ることを表現している。よく見るものに「炒地皮」、「炒股票」、「炒外汇」、「炒房地产」、「炒黄金」等がある。

「多」元々は数量を表す形容詞で、通常は直接に名詞についてその修辞語になることはできない。だが、接辞化の傾向により、現在は「多」は名詞と結合して既に多くの経済用語を形作っている。たとえば、「多渠道」、「多品种」、「多功能」、「多花色」、「多边协定」等である。

「展」には「展销」がある。展示しながら販売し、展示でもって販売を促進する。また「展売」と称する。更に「展演」が生まれた。《文匯報》一九八七年一〇月六日「この度、日本に赴き、服装四〇〇着を『展演』した。これはこれまでに何度も出国した『展演』の中で規模のもっとも大きいものである」。他に「展播」、「展评」があり、経済用語が文化芸術方面にも影響を及ぼしている。

また、多くの言葉は外国から入ったもので、経済関係ではとりわけ外来語が多い。意訳、音訳、音意訳の三種がある。

意訳したものには

「硅谷」元々はアメリカ・カリフォルニア州の聖克拉拉谷（セントグララバレー）で地名である。計算機等の電子工業産品で有名となった。現在、「硅谷（シ

リコンバレー）」の語は中国語の中ですでに電子工業基地の通称となっており、多くのハイテク開発区が自らを当地の「硅谷」と称している。

「新技术」「高技术」英語の high technique の意訳である。発展する新興の高級技術で、電子技術、情報技術、海洋技術、新材料技術、新エネルギー技術、宇宙飛行技術と生物工学技術（バイオテクノロジー）等を包括する。

「黒马」英語の dark horse の意訳である。元の意味は実力の計りがたい競争相手が、人の予測しえなかった成績をおさめた予想外の勝利者を譬える。

「热狗」英語の hot dog の直訳。一種のパン、ソーセージ、ピクルス、辛子で作った軽食。元々は一九〇一年、アメリカの一画家が急にこしらえ使った言葉で後に広く流行した。

「跳蚤市场」英語の flea market。個人が廉価商品を売り出す自由市場。

「黒匣子」英語の black box の意訳。

この他に「软件」(software)、「硬件」(hardware)、「个人计算机」(personal computer)、「绿色革命」(green revolution)、「灰狗」(grey hound) などがある。

音訳のものには

「波音」アメリカ Boeing 飛行機会社の生産した飛行機。「波音」という言葉は人々が熟知している言葉である。

「的士」すなわち taxi の音訳である。この言葉は非常に早く生まれた。作家茅盾の《劫后拾遺》「老魏はほんとに酔っぱらっちまった。的士を呼んで旅館に送り返してくれ」。しかし、「的士」が若者の間で広まったのは近年のことである。タクシーに乗る事を「打的」という。北京の流行語となっている。

「席梦思」高級マット。中国家具市場を席巻した。席梦思（シモンズ）は元はアメリカの高級マットレスを生産する商人の名である。

「卡拉 OK」カラオケの音訳。今では中国大陸を席巻し、地方の町にも「卡拉 OK」の看板が林立している。

「可乐」cola である。ソフトドリンクの呼称。直接翻訳したものに「可口可乐」(coca-cola)、「百事可乐」(pepsi-cola)、中国製のものとして「少林可乐」、「天

府可乐」等がある。

音訳兼意訳のものには

「比萨饼」イタリアの pisa を指す。

「呼拉圈儿」英語の Hula-hoop の音兼意訳語。一種の体操器械。この他に「耐克鞋」(neik)、「桑那浴」(Sauna)、「保龄球」(bowling) 等。

経済用語の発展変化を考察してゆく時、旧い言葉の語意の発展と変化にも注意する必要がある。たとえば、

「菜蓝子」元の意味は食品市場で買い物をするとき、肉、卵、魚、野菜等の副食品を入れる手提げ籠。「菜蓝子」の品物が豊富かどうか、質が良いかどうかは、おおよそその場所の生活レベルを反映しており、それ故「菜蓝子」のがその意味を大きく拡げて、民衆の生活レベルを指すし、また消費水準あるいは消費状況を形容するのに用いられている。たとえば、「抓菜蓝子工程」は副食品供給の豊富さと質の水準を引き上げることを指している。

「过热」ある領域の中で客観的条件あるいは、客観的需要をはるかに超え、盲目的かつ過剰に人力、物力、財力等を投入する不正常な現象を譬える。

「组装」は「原装（完全に製品化されたもの）」と相対し、一般に外国部品を輸入し、それを組立てて出来上がった物を指す。（テレビ、ビデオ、カメラ等の機器、計器）

「松绑」企業あるいは下請部門に、制限をゆるめ比較的多くの自主権を与える行為を指す。

「爆棚」あばら家に人が一杯でまさに爆発せんばかりの様相を言う。人が多く、あるいは事物の発展の程度が極点にまで達したことを指している。

「抢手货」別人の手中から奪い取るほど、商品が人に喜ばれ、購買を争うことを描写している。

「跳槽」新たな職を求め、有望な前途と高い収入を求めること。

「发烧友」ある種の品物に対して度を過ぎた熱狂でもって追い求める人を譬える。

また闇市等の存在によって、経済用語の中にも隠語的な呼び名が出現した。たとえば、米ドルを「美子」と呼び、日本円を「老日」と呼び、香港紙幣を「港纸」と呼ぶ。人民券百元紙幣を「老头票」と称し、百元を

「一棵」と称し、千元を「吨」と称し、万元を「方」と称する等。

新用語新用法が大量に生まれると同時に、経済用語の中には旧い言葉の復活現象が現われた。これらの言葉の語意は、以前と同じであるか、あるいは基本的な意味は同じである。たとえば、「典当」、「拍卖」、「招票」、「販运」、「股票」、「股市」、「僱工」、「招聘」、「彩票」（《現代漢語詞典》旧社会での「富くじ」の通称）、「佣金」（《現代漢語詞典》旧時、売買に当たって仲買の者に与えた報酬）、「银根」（《現代漢語詞典》旧時、市場に貨幣が運転され流通する状況を指す……）。もっとも典型的なものは「专利」という言葉で、文化大革命中に出された《辞海》では、「専利」はブルジョアジーのものとして批判的に解釈しているが、現在ではこれは肯定的に解釈されている。しかし、意味は変わっていないのである。一九八四年になって中国は《中華人民共和国専利法》を公布し、国家専利局を成立させた。

(4)　香港・台湾の言葉の影響

香港・台湾の言葉の大陸への影響は多方面にわたるが、経済用語ではとくに突出している。たとえば、中国は以前、計画経済であり、売り手市場であった。商店の品物は「皇帝の娘、嫁ぐを憂えず」だったが、現在は市場経済で、商品は豊富であり、市場は競争している。そこで商品を売りさばく種々のやり方が現れた。「大酬宾（大安売り）」の言葉は香港からやって来た。

香港では、また、「红包」が流行しており、これは老板（店の主人、社長）が職工に与える賞金である。赤い紙に包んであり、賞金がどのくらいか職工も互いには知らない。「红包」は香港の資本家が企業管理を行う手段である。大陸では「大鍋饭」で、待遇は一律だった。そこで、多くの地方でも香港のやり方を借用した。しかし、公有制の体制下で、指導者は往々にして自分の側近に多くボーナスを出したので、ひとわたりやってみたが効果は良くなかったが。ただ「红包」の言葉だけが伝わり、ある時は下級が上級に贈物をすることも、やはり「红包」と称された。《文匯報》一九八九年一二月二三日「下級が上級に『红包』を贈り、ボーナスを支給する。なんと奇怪なことではないか」。

「大哥大」香港マフィアのボスは「大哥大」と称され、彼らは常に携帯電話を持っている。だから、現在は手に電話を持っていると「大哥大」と呼ばれる。この言い方は現在では大陸でも幅広く受け入れられている。また、広東語では勘定を支払うことを「埋単」、解雇を「炒魷魚」と呼ぶ。これらは標準語の語感からすれば大変奇妙な言い方ではあるが、北京で大流行している。これは香港のものは良いという価値観の反映で、語彙もファッション化するのである。

ある言葉は、本来定着していたが、香港台湾の影響を受け、「一物多名」の現象が現れた。「激光（レザー）」の如きは六十年代には「莱塞」と呼ばれたが、銭学森が「激光」を用いることを提案して、すでに社会に受け入れられた。だが、台湾では「激光」を「镭射」と呼んでおり、「莱塞」と同じ音訳の「镭射」が「后来居上」となって上位を占めた。

甚だしくは方言文字まで現れた。「焗」は広東の方言文字であるが、北京人は「焗发」の言葉に対して、すでに違和感を感じなくなった。香港では家具を「傢俬」と呼び、北京街頭にもすでに「俬」の字があるが、これは字典にはまだ収録されていない。

ある外来語の中にも、香港を通って大陸に流入したものがある。「豆浆」（豆乳）を「豆乳」と呼び、理髪店を「发廊」、「发屋」、「机场（飛行場）」を「空港」と呼ぶ等々である。

（四） おわりに——中国経済用語詞典編纂の必要性

以上に見てきたように、開放政策以後中国では新しい用語が飛躍的に増えており、とりわけ経済関係においてそうである。それ故、中国で出版された経済関係の辞典の数量もまた、多数にのぼる。不完全な統計ではあるが、一九八五年から現在に至るまでに出版された各種の経済辞典は二百種近くある。あるものは経済活動の分野により分類しており、《経商辞典》、《貿易辞典》、《金融辞典》、《財会辞典》等々がその例である。あるものは経済分野により分類しており、《工業経済辞典》、《農業経済辞典》、ひいては牧畜、観光、不動産等の各業界の専門経済辞典がその例であって、既に等しく世に問われているものである。

大まかに見れば、現在すでに出版された経済辞典には、

一般に以下に述べる特長と問題点がある。

(1)　多くの辞典の内容は複雑で、かつ純理論の部分が、比較的大きな比率を占めている。例えば、経済学思想、学説、流派、理論体系等々である。且つ、多くの解釈は往々にして古く、時代遅れで、実用性に劣る。例えば、中国商業出版社が一九八九年に出版した《市場営銷実用辞典》は、名は実用辞典であるが、実際はその大部分の項目は実用性がなく、その解釈は陳腐である。例えば、生産力、生産関係、政治経済学、利潤等の項目は、理論が時代遅れで、いささかの実用性もない。この種の病弊は普遍的に存在している。

(2)　個別の辞典の実用性は優れている。例えば、上海人民出版社が一九八六年に出版した《経商実用手冊》の内容は実用的で、わかりやすく、例えばその中の「中外生意経集錦（国内外の商売に関する信条の抜粋）」の類は、相当数量の典型的でかつよく知られたた商売のモットーを収集しており、精彩のある解釈が加えられている。しかし、この「手冊（ハンドブック）」は専ら、中小企業および個人企業経営者のために作られたものであって、内容は通俗的で、いわば学問的な辞典を作るための原材料とみなすべきものである。ただしこの種の「実用性」に富んだ辞典は全体の中では少数である。

(3)　多くの辞典は、近年の実際の経済・貿易活動の中に現れた、大量の全国的、地方的な土語（方言）、俗語等の経済・貿易の慣用語に対しては、等しく言い及ぶことが少ない。もっとも、中にはこうした語彙を収録するものある。例えば、ハルピン出版社が一九九〇年に出版した《中国経貿新辞典》がそうである。収載された慣用語には、「走俏」、「扶貧」、「官倒」、「三角債」等々があるが、相対的に見れば数量は依然として少なく、多くの典型的な経済・貿易の慣用語が未収録である。例えば「炒魷魚」の如きがそれである。地方的な経済・貿易の方言、「侃价」、「大款」、「倒爺」の類は基本的に収録されていない。またある種の言葉は明らかに時代遅れである。

(4)　およそ中国国内で編纂された経済・貿易類の辞典は、その項目が長すぎ、解釈は無駄な言葉が多く、言葉は精練されていないという問題が普遍的に存在する。前に挙げた《市場営銷実用辞典》は六二万字、九一二項

目、一項目平均七〇〇字であるが、その解釈の多くは教条的理論の受け売りに偏しており、経済活動の実体を反映していない。

以上述べたところを総合すれば、今まで出版された経済・貿易類の辞典は数多いとはいえ、内容や収録語彙には大きな問題がある。中国の社会がとりわけその経済生活において急速な変貌を遂げつつある現在、これら多数の経済辞典の成果を汲み取りながらも、それらを現在の立場から再編成し、中国の経済活動の実態と国民生活を反映する現代中国経済用語を編纂することは、中国自身にとっても急務であると思われる。同時にそうした用語の理解を通じて、中国社会の変化を、その生活のレベルにおいて理解しようとすることは、我々日本人にとっても緊急に必要なことであると思われる。そうした要請に応じうる辞典の編纂が待たれるゆえんである。

（一橋大学教授）